



中將姫一代記

三

^ 13
3294
3



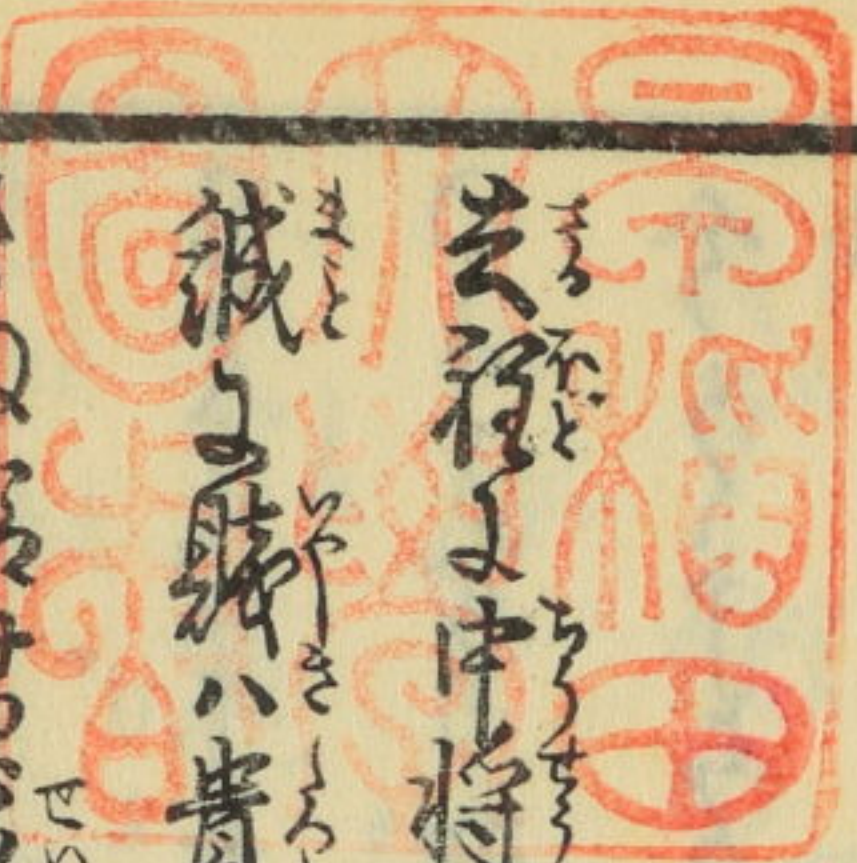
13
3294
義卷

中将姫一代記卷之三

従母後まゝとらも雲雀ふそ中将姫と殺害せんと

とらもま

大正十年八月廿九日
寄
本大學出版部



之程^まは中将姫^{ちゆうしやうひめ}ハ世^よの用^{もち}ひくの敬^{うやまつ}ひあり威^い勢^{せう}目^めは愛^{あい}くまひ
織^{オリ}の織^{オリ}ハ貴^きをさうとらも考^かえらるハ後^{あと}まゝとらもとらもとらもハ世^よス
さぬ姫^{ひめ}君^{きみ}成^な長^{なが}りたがひ次^{ついで}中^{ちゆう}に御^ご量^{りやう}もとらもとらもとらもハ世^よス
人^{ひと}貴^{たか}ぶと就^つくハ後^{あと}母^ぼいよと懸^か志^しを焦^こくまひ或^{ある}財^{さい}を成^なん
中^{ちゆう}向^{むか}ひむい哀^{あは}れ顔^{かほ}はとらもとらもとらもとらもとらもとらもとらも
事^{こと}ハ和^わより折^おををたてて後^{あと}まゝとらもとらもとらもとらもとらもとらも
とらもをたてて後^{あと}まゝとらもとらもとらもとらもとらもとらもとらも
とらもとらもとらもとらもとらもとらもとらもとらもとらもとらも

中将姫一代記 卷之三

孫の言ハ子とくもあはれひとくは産し子のとくあひ
 何とぞ女御后妃の立侍んとぞとて終り終りしは
 あらぬ沙汰を承り拘塞りゆ色。やを換る事ハあは
 まいと可流し沖身も入ざりけりふ下この者の下侍りゆ
 時あつと局の内へぞとくもふものあり烏帽子垂垂の人とも
 見く又ハ下臈の姿とも刀を侍りて儉よとてとて規くは法師
 のようあり加様あるは後なる事あつとと思とてとては自ら
 今くく上らハ他人の不審もあつとされたは事ひろく世よふ
 知りまを御家の瑛瑾とて娘の方の上あしめんとまこと
 しやくよのあいにいとて豊成卿圖一頁と世の中つとあつと

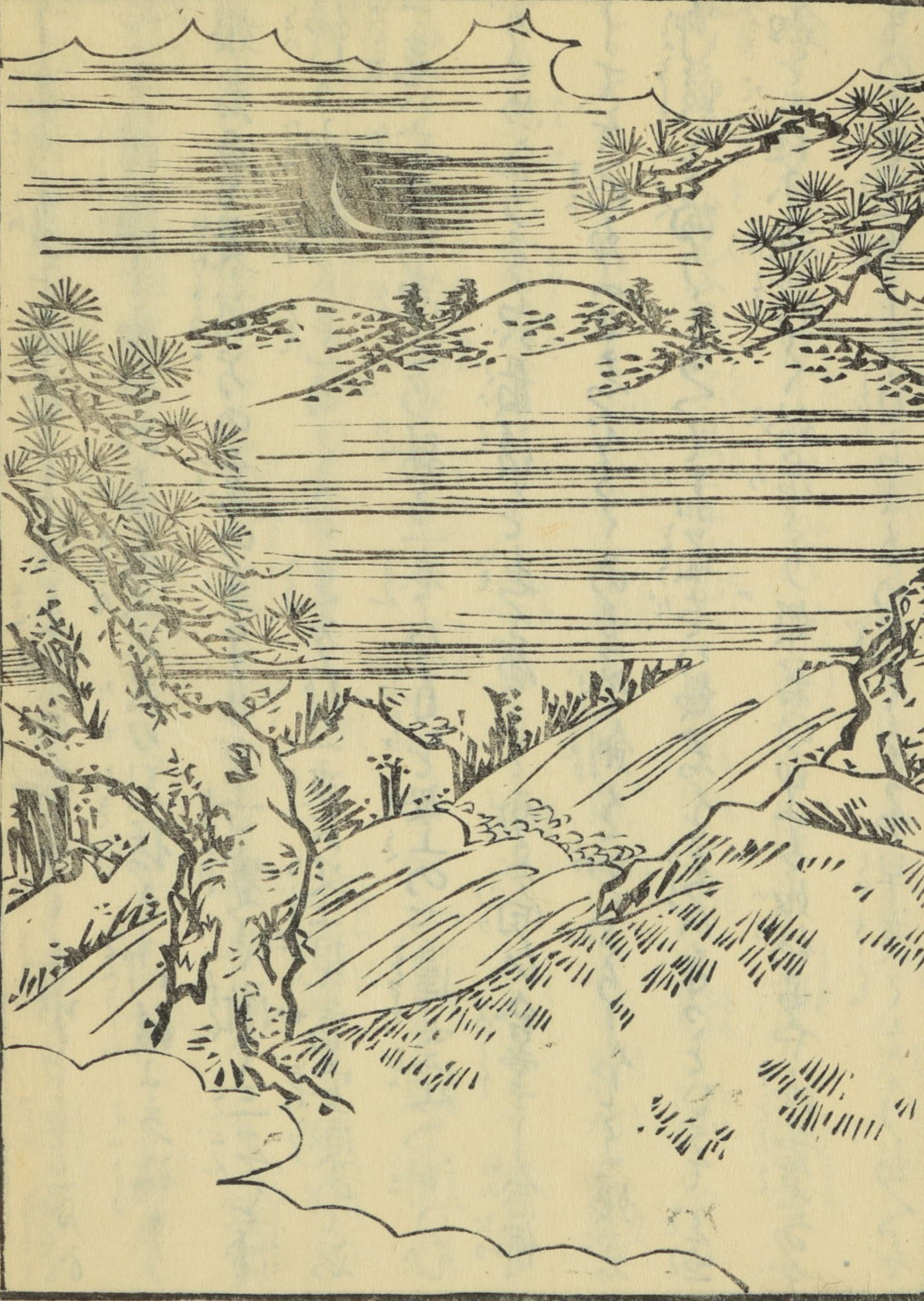
ハ流くる事とてものあり必とて實とてとてとてとてとてとて
 入とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 我る一使の下良ふ森八良とてとて若者ありとてとてとてとて
 う小賒をとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 今有娘が居く母一者のあつとてとてとてとてとてとてとてとて
 時方ゆりやとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 さぐとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 小果して烏帽子垂垂一やとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 成卿とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 かし水のさよとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

かくるこハゆえくあまふとありひはくす扱く勝とて振舞ふ
 後宮母もなるべとあまふといやした下臈は信とまき家門の恥辱
 と云ふ天籟も思ふあり自分けりて推ぶとのむいしと水入る方
 押苗先暫く津侍と脚腰立ハさるるあがらまづく自ら
 まう積のくぐり様よさうい信とんと豊成卿とまはちあ
 せ御寢所へ返しまいり積るるがやどまきあもわけたるが豊成卿ハ
 先なるを引りり勅命ありく流國巡見作せしと一りん
 則今日突是しむつてぶかきとやうく西常門下の人ことを運ら
 せ美くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 中州遊記ハことごとくおかりと思ひあつく切しきまらる事

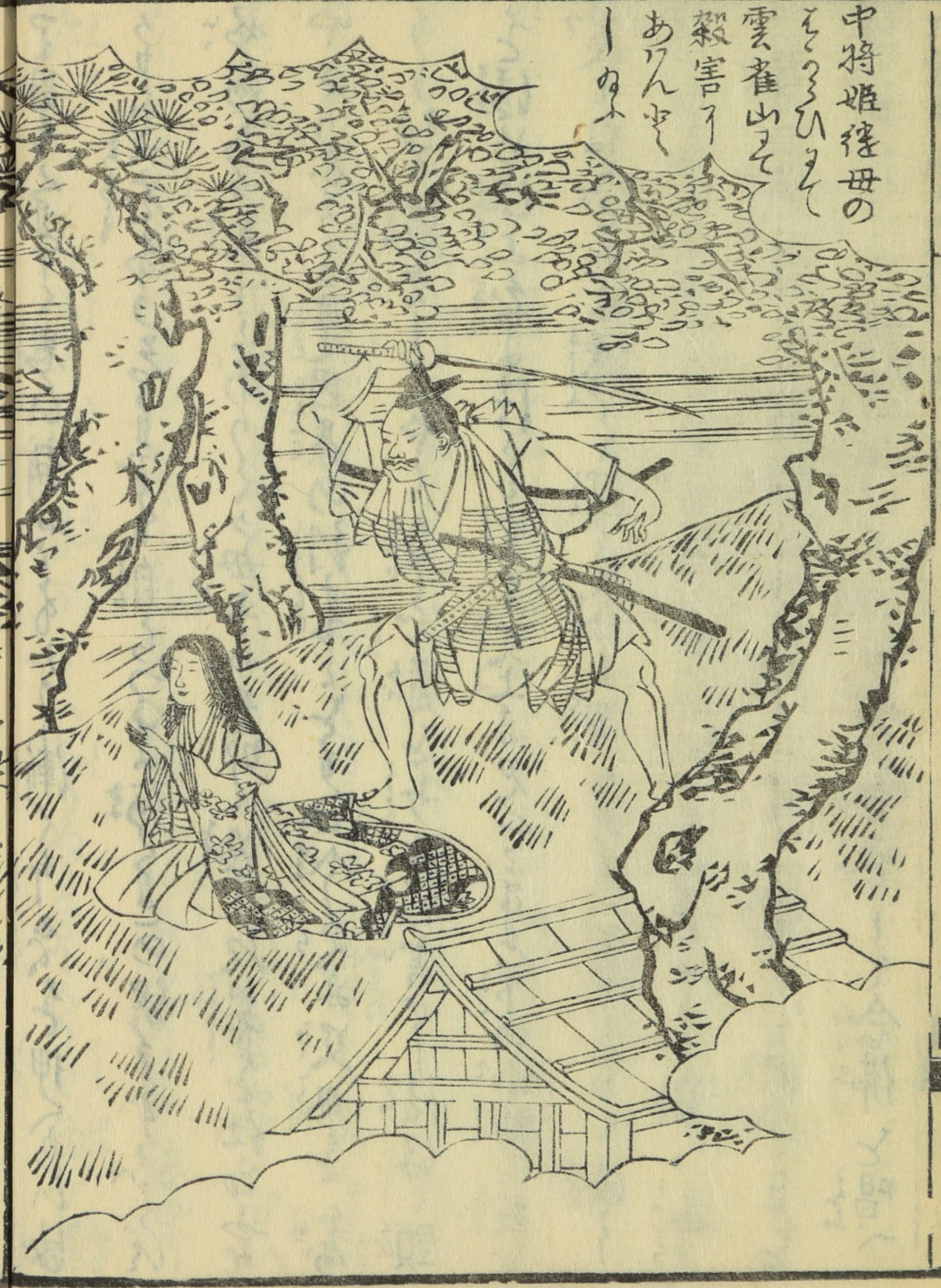
あまふをね井赤坂とくく強壯の武士とわくくくくくくく中將娘也
 流の料もろろ象形に記候國雲雀ハ連行ひとくくく控
 座一必しも人よ漏と事なるとと大臣殿の作なりはくくくく
 今初巡見よあめく津服なとまきあ自らよなまらうくとの
 後かり汝今日彼あめく首とみ持海とよと切よハ大臣殿く
 中州遊記ハことごとくおかりと思ひあつく切しきまらる事
 目くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 盛かきとて遊く紀の國の方かとのくくくくくくく市橋屋
 るとゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 の遊樂よとてあめくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

うしてあつてさうなる娘君はまうつくこと終母のたつと世業ころの
 中身く休況を守りも魂も身もそつとあそびを沈むくぞあつて
 りる程あつて紀の國有田郡雲雀山の谷原をまよふ輿を啓
 下敷をぬき嘉敷をまき人殺めのころ娘君と輿より引あつて
 戸やう兵今こころを御供仕せり又大臣の作中御命を
 失ひをまよとの御事かきまかごころむくと云ふめつたかめさ
 ちまうし御後又迫りまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 花の御供とかなり戸やうさる中もいふある科とられたり
 くらさ夏月よ遠まのやとねささの娘君何れを差てより終母乃
 終るまよか加藤の終るまよとハ刻りぬきを今又袖を塞
 了目もくまよとく思ひ辨るまよとハ漸く御事かきを押しあひ女
 くらや又をまよりまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 ぬ何あるあつてまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 やさうまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 うらひの道まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 をほりけしと名まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 畏れねんころまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 ねむるまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 去巻の御供を御供通まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 讀めつたたり續経終るを西丹向ひ合掌して念佛と唱へ

うしてあつてさうなる娘君はまうつくこと終母のたつと世業ころの
 中身く休況を守りも魂も身もそつとあそびを沈むくぞあつて
 りる程あつて紀の國有田郡雲雀山の谷原をまよふ輿を啓
 下敷をぬき嘉敷をまき人殺めのころ娘君と輿より引あつて
 戸やう兵今こころを御供仕せり又大臣の作中御命を
 失ひをまよとの御事かきまかごころむくと云ふめつたかめさ
 ちまうし御後又迫りまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 花の御供とかなり戸やうさる中もいふある科とられたり
 くらさ夏月よ遠まのやとねささの娘君何れを差てより終母乃
 終るまよか加藤の終るまよとハ刻りぬきを今又袖を塞
 了目もくまよとく思ひ辨るまよとハ漸く御事かきを押しあひ女
 くらや又をまよりまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 ぬ何あるあつてまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 やさうまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 うらひの道まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 をほりけしと名まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 畏れねんころまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 ねむるまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 去巻の御供を御供通まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
 讀めつたたり續経終るを西丹向ひ合掌して念佛と唱へ



中將姫母の
雲雀山にて
殺害す
ありんか
いぬ



一其時首をさぐりてくまのあめくひのりてりし御座
 してど瀆涌しゆいぬおるたハ太刀引拵と御後よ立侍り
 姫君母も畧侍別の家の方をもど舌塞く漸く三ヶと瀆
 終りゆい今ハ是めく事足方む一巻ハ又上現當安樂のよ
 一巻ハ亡母乃御くお終る一巻々自と母上の二ッ蓮舟逆くむハむ
 がくめありさらハ最後をきくゆくと西め向い合掌し念佛
 してぞゆゆよ志ぞくくあはれを剣をかくざりやとて娘君
 御後をゆりてあくを品着たハ娘君をきいもるといして
 剣と大地不抛捨く依居り姫君のゆくと如何もや汝を言る
 ものうれ兎角して自らよもの思てくるも早疾くことろあくが
 着たハやくく起り候とゆぐいやうりるさうハ中を討たる
 事あるがハ流すは花の御後乃信して希なる御を
 今の御えよ乃余思ふ其かを心み流し一盃は漆りあ
 してそろくく行は御命を助もん候令いりある罪科み逢と
 ても前世の宿因かしくんよう討まりく俸祿とあきていやくど
 もかろく我齡何ぞ百年を保くやけ上ハ御命を助す我も又
 けいんは好し御いりてらりやハ一俸あが御後母ハ上る謀計
 ありと御上衣とや更巴の股と実裂く其血をそとて怨よ
 惚めくく姫君母やう流命とあてり事をゆりて告ぐん
 ハ不審と然し終りゆ又捜しあてらるる早くゆりて其後と

継母は刀をせりさん姫君申さし興の中は母のく今夜を
 さそまぬ月ハまき俗く御月よりくるべしと云はく心と
 一飛鳥のついでいとど一が漸おまはく御館よりく速
 将監が宅めりり對面して倍りくる今御某を御基所
 の御側へはと作らるるハ今度姫君の御方にも御某を
 父の御いりはとひそく小弁く推しをさやう作ありとあり
 一次第をさくくさそ迷惑をがくも君の命せんくあや雲
 雀は御供し様子を承るは姫君の御方に一つも誤りなく皆是
 継母後言のなるとところなりあまは御方おぼく御合は
 助けあり継母への御中より御小袖をり文某と服と裂血を

懽に姉々姫君の御首を討奉り是と能とせんと持めりぬ
 さうさぐら女候と疑を深きものかとい首を澄抜まん
 ぞこれい合点あるは不首尾の事もつ貴公御御は
 清濁もるやうとそまき推しけるならそいん御常守
 て大に驚きと扱ひとさうして思ひよるる継母の後言
 下格も今おま君の御供はり御見送りも只今御毛
 たるいし事なまぬ一さうくそをさそまもの
 吾妻去年おきてしよりよる御姉女もあそおひは
 うそ目を見よハ姫君の御不祥なりうまもして首尾
 よく調へんと小首を傾けくる

中井村二不詳し 卷之三

時常姫流を御方が参りよさる事

将くもさく内常ヤルハ切差をなすと思案してこれ
 よやく邪智深に徒女の心をむしむ小袖をらの津一
 めてハ中へ合点いこころまゝ突の首をえでとんハ疑
 とのこゝ又もや波の中を披き事もあるべしをさふ
 事もちも其をむしむのてむくありまゝ一人乃
 姫あり津をこころく尚年十四歳みして姫君と同年
 幸けし付もお似し是と御方を参りよさては難
 を救いもんととむく奥に入娘とむしてくくるを
 今乃姫君くくの次子めくかゝるを信めて御令下
 助奉之を討たる首と持はくえでよとの事あるを
 指さし難義よとむく野下も石のち御令下と
 控らん式さくもの常ありさるは般姫君の御方替
 又之をさくしめてハ史儀来せめくは女は対面一ツ
 蓮みおひ集らじ上品の其堂みけむりあひかりのち
 えんれだ姫君ゆるハ父上の作何とらさかんと御
 主様の御為めありまひ令と控へ事あるもとむく
 早く首をさくむく御引をむく
 ぬて今乃君が命よもむくはひくもくは御令下
 と辞せして西に向へると合頭一のくはらりやと

ぬて今乃君が命よもむくはひくもくは御令下
 と辞せして西に向へると合頭一のくはらりやと

又婦備を心算を修く諸國使の母ありと依りて去
 家を初く急を引移してそのの勢ざるよそ者ふよけを姫君の
 射白しなれ御輿よりまういあむい嬰児の毎い母のあふは
 心地あくもを合せ移いあし海原ぞせをあくどくそくそくそく
 勢くも御惠をまがりしはの中よ遷一又婦ハ御側あけを
 て今日の疲を息りりりておもひたれハ拙末を集又移を
 第を新く急恨を憂い姫君を居あし書ハ涙をまわ
 芥を信あそふ山あ又くハ菓を拾いあれをそく又ハ里あ
 野系然聖坊の旅人よ袖を擲く物こそい免解して世を
 海り姫君をさる力も又姫君ハ毎日行後浄土行を續誦し

とい稱名念佛の歌もろをけり月日を送りりりり憂中
 母月日の駒の足速くは羊とくふくそく姫君こまのまを速く
 といり初くそくそく浮世のありそ女杖も杖も杖とりりり
 ね井ある大俄よ病よ深く起階あ惱こく姫君も其妻も
 心をそくそくそく其驗もねく移くそくわたりあむ姫君の
 御歎妻の然傷深くは泣く座りの傍よ葬るをそくそく
 標幟とて姫君又御力を海一のた藤太が妻ハ甲斐女くそく
 仕く妻いも姫君ハ後家よ命じて紙をそく末終く毎日稱
 濟浄土行を書寫してまき先亡の御母のみ近くハ加ふる
 う追言めそく續後念佛色りもそく妻を



豊成の雲
 雀山の羽
 しのひ
 中羽姫
 小邊の



ふ多くと申すを其其女をを凡そわづ疑もかゝるまゝの女に
なりし父上かりあふ孝を蒙りしがの科をく一層逃し
一令今又ふ思儀め父母達より殺害せしむるをあま
くと好い姪孫を殺して父上のゆより害をぬくものと
思切る承りて華傍の着るうづ終母の終言ふ信く又のふ孝
を愛りは山中母己殺せりべうりてをなけの武士根井が
が懐め毎墓令と助りく今日まゝハ活延れま幸まよる人
の形と見と只今適君をかく憐れた事をもいふはあつ
やとて母掛らんとハさく是れもあま次あり有為せ常の
世の中におはる又驚くごとく母のあはれさへ思はまは殺む
よとて先生よ向てまゝの豊成卿も思ひあはれりてをまど
其い谷を御洗ひとるゆふもなれ中将姫をば拘り駈と
まことわづりと控め向は婚父のふ孝を蒙るとハ其豊成が事か
や我愚昧めして他人の信を信と罪かれ姫と交りんとせ
ふみ又道末を控みはれ今毎ひ汝も對面とる事儀老後
乃幸し御洗ひに限りたり姫君も御洗ひの儀とてあはれ豊成卿
作たるハ我汝をまゝいしより後人のあはれにハ我子のま
を悲し人の女の成長とるをまゝかゝるあはれにまじはれん
ものごとく歎く且まゝをを信物と信しよ今聞らざりよ對面
とると偏再生乃を地よのまゝとてまゝかゝる加ふたは又婦が身

とると偏再生乃を地よのまゝとてまゝかゝる加ふたは又婦が身

風がまろえのこゝに威やまろく老るる若れこゝめまゝに
 毒ありあれど若れもたのこゝくを治ぶらるる
 化世のあとも存せしむる世の世栄たはは
 るせらるる若れの中れたのこゝを治ぶらるる
 わくたうだちたりしじいとままなりたはるるのあわが
 ちこゝの神とれ果かりたりちの御測ははるる
 まあらしんとせしむるもあはれかたの孝者
 かり悲世の道をたらし無為の道よ入せん
 まとのたらしの報恩未末もせらるる孝者なりと
 御佛も説むかたはるるを思おたりと上を
 佛の道ぬともむれたゆゑなり未の世に花るる豊小
 ちいまるるせんとねがひたり

深く〜あつとよまを事の上かた道とせむ
 めは書置むしを目う勢とてゆく下部ともははれ只一人
 層形とせむいもむもより初るあ夜の海を求めたり
 のこゝ御足もせん御草鞋も血も深く遠めと里のこゝへ
 我の中よ思むあつとに明なれば中ありげあはれ坊は入
 て利繁るる事と御せむつとを傷はるる御容をとりて棄
 恩入無為の御志はるる海傍めを治らるる御年も若く孫
 めを治らるる御方とせむとせむの中へ御初は御髪とせむ

中の上の怒もあつて叶まらぬとせし娘夫のむすむすも
 貴たもろふあつた遠去の氏の女かろが初めく父母とら
 焼かすものよそごとらと作らう道さひ又は嫌あるもの
 成りしおれむま法のをもあつた世の中ものあつたを
 戒くはまらへくは後世を予しんと思ひはれん
 初髪をとれとあつた涙を流しつゝのむすむすも
 感謝しつゝ御痛をまをさるるを思はれしは困るなり
 御利髪あつた御老女を頼りしとら
 せりしとら御老女が家よ
 も毎日續行念佛色りむすむすもあつた
 何回よりあつた四十斗なる尼ろあつた御解ら
 彩よ小庵を造りし御老女を念佛しつゝ娘夫乃
 事及み誠とあつた女性の深れ思入を孫傍かり
 門あつた家ハ雑念あつたして修好の深りもあつた
 室とそ作らへくものなく物静かきとらあつた
 津葉とつて修し念佛中らんと者りしとら娘夫はあつた
 る佛乃御引合とつて思ひあつた彼尼公の庵へあつた晝夜
 とつてあつた心静し念佛しつゝ豊成卿とらあつた
 娘とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 江野乃あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

何回よりあつた四十斗なる尼ろあつた御解ら
 彩よ小庵を造りし御老女を念佛しつゝ娘夫乃
 事及み誠とあつた女性の深れ思入を孫傍かり
 門あつた家ハ雑念あつたして修好の深りもあつた
 室とそ作らへくものなく物静かきとらあつた
 津葉とつて修し念佛中らんと者りしとら娘夫はあつた
 る佛乃御引合とつて思ひあつた彼尼公の庵へあつた晝夜
 とつてあつた心静し念佛しつゝ豊成卿とらあつた
 娘とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 江野乃あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

初永々る陰陽博士乃勘文よ御令八恙か一ある中
 ハ御豆所知ぐ一とかりのく御箱の中より御書
 を忍び又卯より姫君ハ有庭ら入せむい御も家
 一御令一六豊成はの誓一公と降免思惟一そむひた
 りの支恋駐太子御も家百ともの御父浄飯王制一
 一の事あつげ姫も又一よりかるむ一あるを長く
 するま下ましく一子も家ととハ九族又生むとやその
 中一もまると一とく彼心中とあくと弟屋と結ぶ
 事とて受むむ一ハ別姫君先の尾は信をよはる
 又後王御性行るひなりしそ屋とハはとを屋と
 男末の由と舊流のそより今尚無らるの権入心院と
 といふなり

